

第 I 章 遺跡の概観

第 1 節 下寺尾遺跡群と国指定史跡（第 1・3 図、表 1）

1-1. 下寺尾遺跡群とは

茅ヶ崎市北西部に位置する下寺尾地区には隣接する香川・みずき地区と寒川町東部の岡田・大曲地区を含め、複数の遺跡が所在している。これまでの調査によって、特に古代の成果については関連する内容を持つことが明らかとなり、一つの遺跡群として把握することが効果的と考えられた。そこで、関連する遺跡をまとめて「下寺尾遺跡群」と呼称することとした。

具体的には台地上に所在する西方遺跡（茅ヶ崎市 No.1）と台地南側の砂丘および低湿地部分に展開する茅ヶ崎市の七堂伽藍跡（茅ヶ崎市 No.34）を中心として、隣接する寒川町の大曲五反田遺跡（寒川町 No.76）や岡田南河内遺跡（寒川町 No.69）、さらに駒寄川を挟んで南に位置する茅ヶ崎市の香川北 B 遺跡（茅ヶ崎市 No.49）で構成される。

また、下寺尾遺跡群は古代遺跡のほか、縄文時代前期の貝塚や弥生時代中期の環濠集落、中近世の造成・土地利用の痕跡などが把握されている。つまり、複数の遺跡が関連するというだけでなく、時代の異なる要素が重層するという面を持ち、さらに、集落・官衙・寺院跡・耕作地という異なる性格を持つ面も含んでいる。

下寺尾遺跡群を構成する複数の遺跡は上記の 5 遺跡になるが、中心である西方遺跡の名称は平成 24(2012) 年からのもので、それ以前は登録時期の違いで西方 A 遺跡、西方 B 遺跡、西方 C 遺跡に区分され、実施された調査名も「西方 A 遺跡第 1 次調査」のように振り分けられていた。各包蔵地の境界が接していたこと、確認された遺跡内容がほぼ同一なことに加え、史跡指定への動きを受け西方遺跡に統合された。過去の調査については刊行された報告書名で使用されていることもあり、表 2 で示した調査一覧は実施当時の呼称で表示している。

1-2. 下寺尾遺跡群の概観

次に、下寺尾遺跡群を構成する各遺跡の内容を「下寺尾官衙遺跡群の調査」（大村ほか 2013）に沿って時代ごとに概観する。

昭和 38(1963) 年夏、市民からの通報で現地に赴いた岡本勇氏は貝塚の存在を確認し、茅ヶ崎市教育委員会、立教大学考古学研究会と協力し、その年の秋と翌年夏に発掘調査を実施した。これが下寺尾地区における遺跡調査の始まりであり、縄文時代前期の住居址内貝塚は「西方貝塚」と命名され、茅ヶ崎市を代表する遺跡の一つとなった。その後、西方遺跡は弥生時代中期の環濠集落、古墳時代後期の集落と変遷し、7 世紀後半には高座郡家に比定される遺構群が造営され、9 世紀前半まで存続する。古代末以降は希薄な時代が続くが、溝状遺構や宝永火山灰をまとめて埋めた土坑などから耕作地としての利用が想定されている。

台地先端部で屈曲する小出川と駒寄川の合流部に近い台地下の微高地には古代寺院の存在が伝えられ、地元住民から「七堂伽藍跡」と呼ばれていた。昭和 53(1978) 年の調査で瓦集中部や区画溝を確認し、初期寺院の存在が明らかとなった。出土瓦の研究や市教委による追加調査を通じて高座郡家と同じ時期に創建されたと考えられている。台帳登録された遺跡名は現在も「七堂伽藍跡」が使用されているが、後述する下寺尾官衙遺跡群を構成する古代寺院を限定して「下寺尾廃寺」と呼称する場合がある。さらに、遺跡西部では小出川の岸を造成した川津と付属建物からなる官衙関連施設が発見された。また、寺院に先立つ弥生時代後期から古墳時代前期には集落の展開が確認されている。

七堂伽藍跡に隣接する大曲五反田遺跡や岡田南河内遺跡、北 B 遺跡では小出川・駒寄川の埋没した旧河道から多量の墨書土器・人形木製品・皇朝銭・馬歯などが発見され、各所で祭祀が行われたと考えられている。

以上のことをまとめると、空間的広がりで捉えた下寺尾遺跡群は下寺尾西方遺跡、七堂伽藍跡、岡田南河内遺跡、大曲五反田遺跡、北 B 遺跡の 5 遺跡からなる。これに時代的要素を加え、高座郡家と下寺尾廃寺を中心とした古代官衙関連遺構を総称して「下寺尾官衙遺跡群」と定義される。

さらに、下寺尾官衙遺跡群の内、平成 27(2015) 年 3 月 20 日に国史跡の指定を受けた範囲については「史跡下寺尾官衙遺跡群」と称し、同様に、令和元(2019) 年 2 月 16 日に国史跡の指定を受けた下寺尾西方遺跡の弥生時代中期環濠集落の範囲については、「史跡下寺尾西方遺跡」と称している。

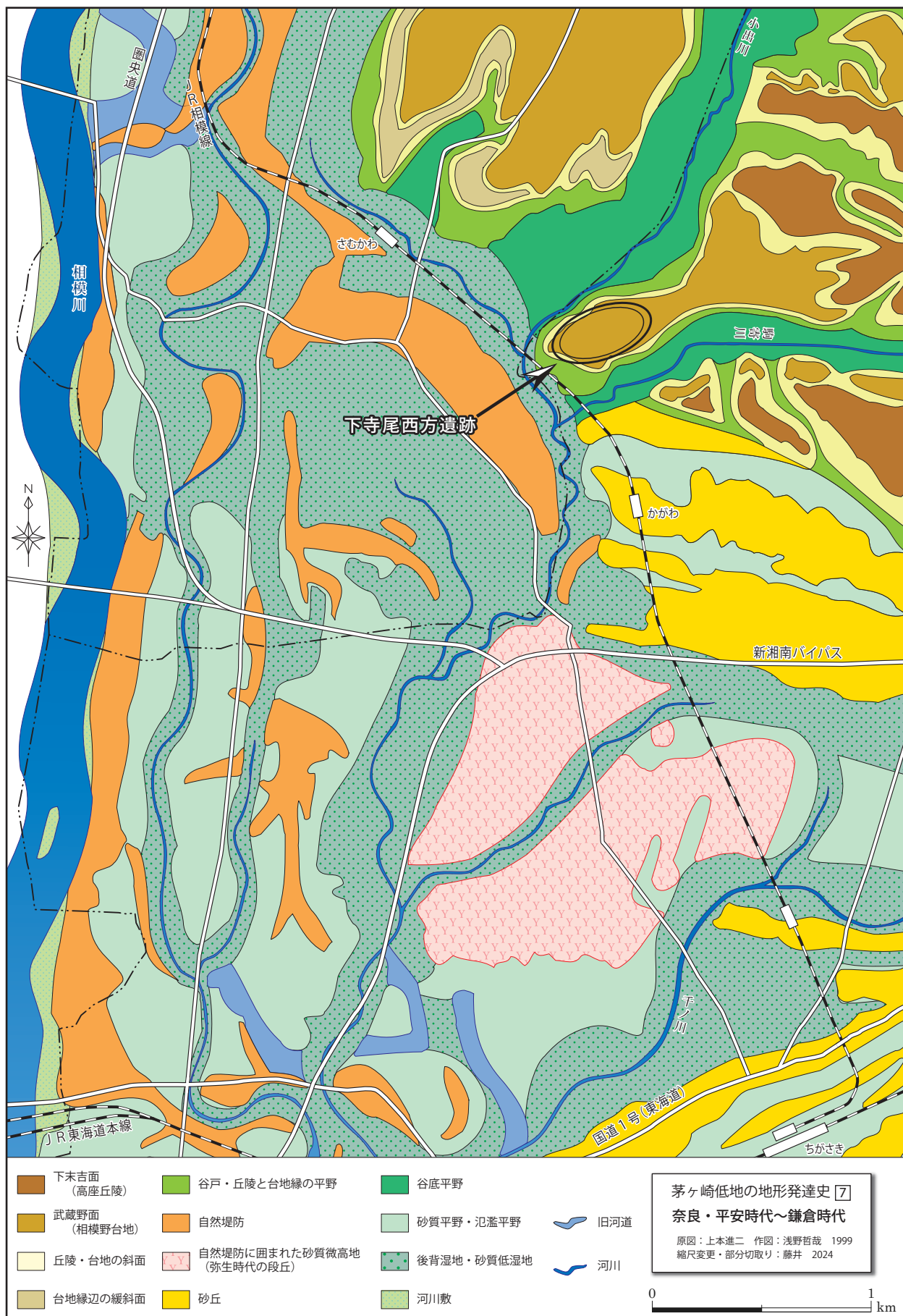
第2節 遺跡の位置と立地 (第1～4図、表1・2)

神奈川県南部中央に位置する茅ヶ崎市は相模湾に面した湘南平野の一面を占め、東西 6.94km、南北 7.60km で、面積は 35.76km² を測り、東から北は藤沢市、北西は高座郡寒川町、西は相模川を挟んで平塚市と接している。西方遺跡(神奈川県・茅ヶ崎市埋蔵文化財包蔵地台帳 No.1：以下、本遺跡)は茅ヶ崎市北西部の下寺尾地区に所在し、JR 東海道本線茅ヶ崎駅から北へ約 3.8km、JR 相模線寒川駅から東南東へ約 1.0km に位置する。

茅ヶ崎市域の地形は北部の台地・丘陵地帯と南西部の自然堤防地帯、南東部の砂丘地帯に大別され、上本進二氏は「茅ヶ崎低地の地形発達と遺跡形成」で詳細な分類を行い、最終氷期から現代まで 8 枚の地形分類図でその変遷を示されている(上本・浅野 1999)。下寺尾地区西部はこの 3 種の地形が絶妙に接する部分に位置しており、本節では、この成果を基に遺跡の立地をみていきたい。

台地・丘陵地帯は相模川東岸に広く発達した相模野台地の南西部にあたり、市域での分布主体をなすのは、下末吉面に比定される高座丘陵である。本遺跡の北北東約 7km に位置する綾瀬市吉岡を北端とし、藤沢市城南、茅ヶ崎市下寺尾を結んだ三角形に分布し、標高 35～50m を測る。市北部を流れる小出川や駒寄川などによって浸食が進み、平坦面は少なく、樹枝状の谷戸が発達している。

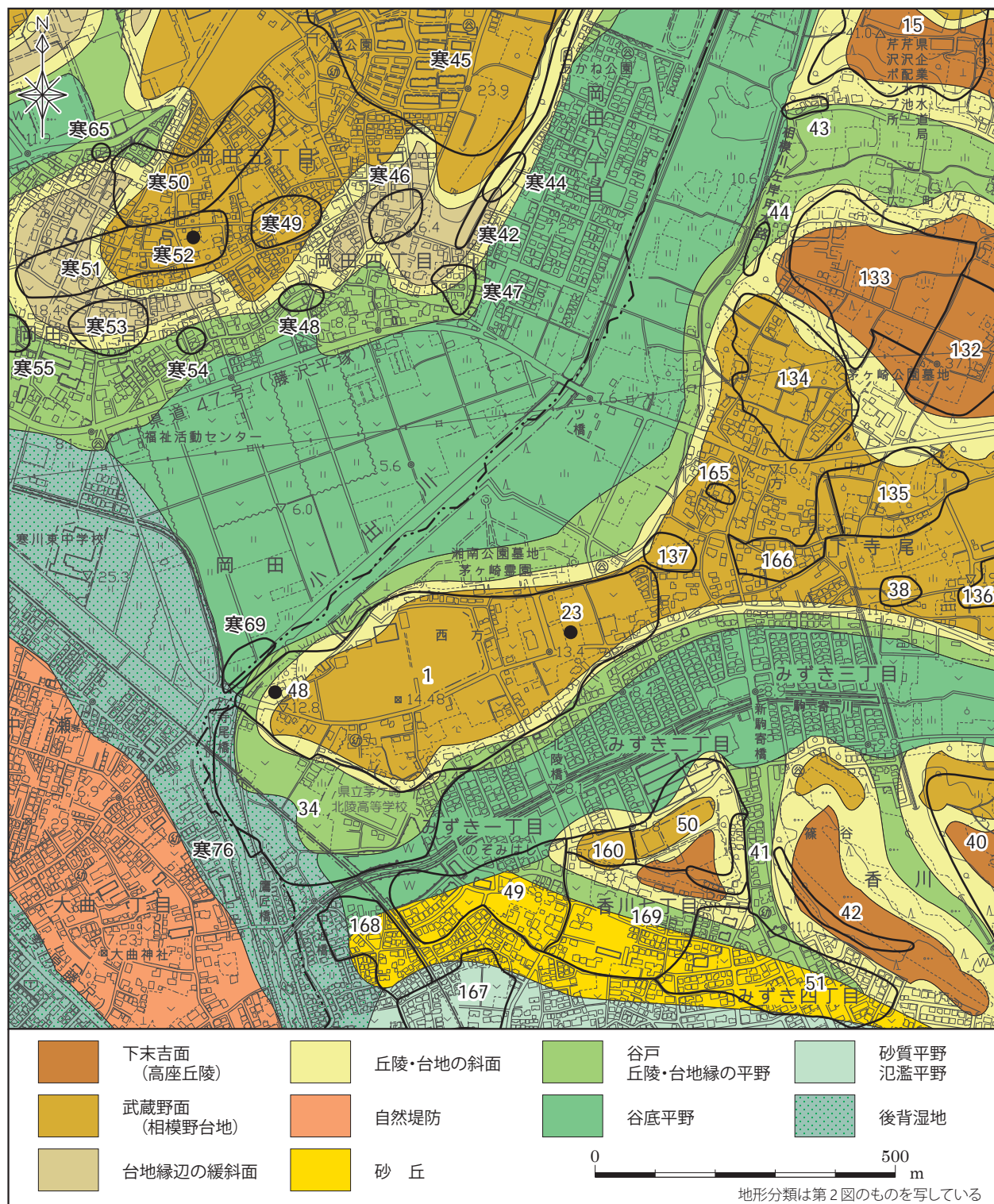
相模野台地を代表する段丘面である相模原面は武蔵野段丘に比定され、相模原市から藤沢市まで広大な平坦面が広がっている。座間丘陵・高座丘陵を含めた範囲が旧相模国高座郡の領域ということが出来る特徴的な地形である。一方、茅ヶ崎市域の相模原面は高座丘陵の先端に形成され、小出川と駒寄川沿いに分布している。下寺尾地区では、高座丘陵と接する北東方向から北陵高校のある南西方向に約 1.2km の舌状台地として平坦面が延びている。標高は約 25m から 12m までで傾斜はやや強いといえる。先端部は小



第2図 遺跡周辺地形分類図 (1/25,000)

出川によって境されるが、南西部は沖積層の下に埋没段丘として存在することがボーリング調査等で確認されている。

縄文時代前期の海進期にはこれらの台地・丘陵縁辺部まで汀線が進出したとされ、現在の茅ヶ崎市街地は海中に没していた。西方地区では岬状の台地先端に砂洲が形成されるとともに小出川・駒寄川の谷は出口が狭められ、汽水湖が形成されたと考えられている。



第3図 周辺遺跡分布図 (1/10,000)

表 1 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	時 代
1	下寺尾西方遺跡	縄文時代(早・前・中期)、弥生時代(中期)、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世
15	臼久保 A 遺跡	縄文時代(早・中期)、弥生時代(中・後期)、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世
23	西方遺跡内の塚	
34	七堂伽藍跡	縄文時代、弥生時代(後期)、古墳時代(前・後期)、奈良時代、平安時代、中世、近世
38	東方 D 遺跡	奈良時代、平安時代
40	南方 B 遺跡	弥生時代(後期)、奈良時代、平安時代
41	篠山横穴群	古墳時代(末期)
42	篠谷横穴群	古墳時代(末期)
43	広町 A 横穴群	古墳時代(末期)
44	広町 B 横穴群	古墳時代(末期)
48	西方貝塚	縄文時代(前期)
49	北 B 遺跡	古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世
50	篠山遺跡	弥生時代(後期)、奈良時代、平安時代
51	篠谷遺跡	縄文時代(後期)、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世
132	長久保 A 遺跡	奈良時代、平安時代、中世
133	広町遺跡	縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代
134	北方 B 遺跡	奈良時代、平安時代
135	東方 A 遺跡	奈良時代、平安時代、近世
136	東方 B 遺跡	古墳時代、奈良時代、平安時代
137	北方 A 遺跡	縄文時代(前・中・後期)、古墳時代、奈良時代、平安時代
160	北 C 遺跡	縄文時代(後期)、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世
165	北方横穴群	古墳時代(末期)
166	北方 C 遺跡	奈良時代、平安時代
167	中通 C 遺跡	古墳時代(末期)、奈良時代、平安時代
168	中通 D 遺跡	奈良時代、平安時代
169	北 D 遺跡	弥生時代(後期)、古墳時代(後期)、奈良時代、平安時代、中世、近世
寒 42	越の山横穴墓群	古墳時代
寒 44	寒川町 No.44 遺跡	
寒 45	岡田遺跡	旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代
寒 46	寒川町 No.46 遺跡	弥生時代(後期)
寒 47	寒川町 No.47 遺跡	縄文時代、弥生時代(後期)
寒 48	寒川町 No.48 遺跡	弥生時代(後期)
寒 49	丸山遺跡	弥生時代(後期)、古墳時代
寒 50	高田遺跡	弥生時代(後期)、古墳時代
寒 51	高田南遺跡	弥生時代
寒 52	塔の塚	中世
寒 53	岡田東河内遺跡	弥生時代(後期)、平安時代
寒 54	寒川町 No.54 遺跡	弥生時代(後期)
寒 55	寒川町 No.55 遺跡	
寒 65	法連寺坂横穴墓群	古墳時代
寒 69	岡田南河内遺跡	縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世
寒 76	大曲五反田遺跡	弥生時代、奈良時代、平安時代、中世、近世

その後、古墳時代までは小海退期に入り、海岸線はほぼ現在と同じ位置に後退した。それにつれて市域南東部には東西方向に延びる砂丘列が形成され、現在 10 列を数える砂丘の内 9 列がすでに延びていたと考えられている。

また、本遺跡と共に下寺尾遺跡群を構成する七堂伽藍跡の地点は上本氏の分類では「台地縁の平野」（第 2・3 図）とされているが、七堂伽藍跡の確認調査によって砂丘と呼べるまでに発達していたことが判明した（大村ほか 2013）。第 4 図に示した地形分類では砂丘と旧河道性凹地も表現している。

一方、南西部には相模川が運搬する土砂が堆積した自然堤防地帯が分布することになる。相模川東岸では河口から約 20km 北の相模原市南区新戸付近を始点に断続的に帯状の自然堤防が形成されている。市域の自然堤防は相模川本流の蛇行と支流である小出川の流路変更などで後背湿地や旧河道が複雑に分布している。この中で、寒川町との市町界に近い西久保地区を北の頂点として東は円蔵地区、南は矢畑地区と浜之郷地区を含む大きな三角形を描く微高地が広がっている。中世以降「懷島」と称された地域であり、平坦面が広く分布する状況は一般的な自然堤防の様相とは異なるもので、上本氏は形成年代も考慮し「弥生時代の段丘」と呼称している。ただし、この地形面は湘南平野の中でも茅ヶ崎低地固有であるため、一般的には自然堤防あるいは沖積微高地と分類されることが多い。弥生時代の段丘にはその名が示すとおり弥生時代中期には人々の活動の痕跡が認められ、弥生時代末には集落が各所で営まれていたことが判明している。

第 3 節 周辺の遺跡と過去の調査（第 1～4 図、表 1・2）

前節で述べたとおり、下寺尾遺跡群周辺の地形は台地・丘陵部と砂丘地帯、自然堤防地帯が混在し、それぞれの地形に合わせた土地利用が時代ごとになされ、多くの遺跡が認識されている。ここでは周辺遺跡を含め、時代ごとの概要をみていきたい。

3-1. 旧石器時代

調査機会が少ないことに起因して、発見例も限られている。

相模原面に立地し、小出川に面した寒川町大蔵東原遺跡（第 1 図①）で 4 基の礫群が確認されたほかは岡田遺跡（寒川町 No.45）でナイフ形石器が発見されている（寒川町 2000）。茅ヶ崎市内では西方 A 遺跡第 5 次調査（第 4 図 15）の試掘でソフトローム層中から黒曜石の剥片が出土している。また、下寺尾遺跡群東方の高座丘陵では大島仲谷遺跡や諏訪谷西遺跡、椎ノ木坂遺跡で発見例があり（阿部ほか 1997）、特に、諏訪谷西遺跡の剥片 3 点は関東ローム層第二黒色帯（B2 層）からの出土で、茅ヶ崎市最古の遺物となっている。

3-2. 縄文時代

台地・丘陵上を中心に草創期から晩期の遺跡が確認され、下寺尾遺跡群周辺でも多くの成果を得ている。

草創期では、臼久保 A 遺跡（No.15）や岡田遺跡で有舌尖頭器が発見され、早期には臼久保 A 遺跡で竪穴住居 1 軒と多数の集石、炉穴が確認されている。

前期では下寺尾遺跡群の基軸要素のひとつ、西方貝塚（No.48）が著名である。役目を終えた竪穴住居内

に廃棄されたもので、貝塚としては小規模である。数種の貝と魚骨・獣骨がみられるが、汽水性のヤマトシジミを主体にすることから駒寄川谷口部に砂州が発達し、ラグーンが形成されたことの根拠となっている(茅ヶ崎市史通史編)。また、同時期の竪穴住居はほかに3軒が確認され、台地先端部には集石や土器捨て場が散在する(大村ほか2018)。

中期は台地上の遺跡各所で遺物が発見されているが、注目されるのは岡田遺跡である。勝坂式～加曽利E式期の環状集落3か所が確認され、竪穴住居は1,000軒を超えると想定されている(寒川町2000)。また、海退にともない高座丘陵南縁付近に形成された砂丘でも痕跡が確認されている。

後期では市内4か所の貝塚が目を引く。小出川と駒寄川の谷奥に丸山(遠藤)貝塚(図外)、堤貝塚(県指定史跡：第1図②)、行谷貝塚(第1図③)、久保山貝塚(久保山A遺跡：第1図④)が知られ、堤貝塚や久保山貝塚では海水性のダンベイキシヤゴが主体となる(茅ヶ崎市史通史編)。すでに海岸線が後退していたこの時期に谷奥に純鹹あるいは主鹹貝塚が形成された経緯は解明されておらず、茅ヶ崎市史の大きな謎のひとつである。

晩期では確認例が減少するが、国道1号に近い居村遺跡(第1図)周辺で遺物が発見されている。

3-3. 弥生時代

縄文時代と同様、台地上を中心に展開するが、砂丘地帯でも集落が営まれ、自然堤防地帯にも痕跡が認められている。

下寺尾西方遺跡の主要構成要素である中期宮ノ台式期の環濠集落については史跡指定に向けて作成された「下寺尾西方遺跡の調査」(大村ほか2018)に詳しいが、本書掲載地点も含めて新たな知見を得ている。また、同時期の遺跡としては寒川町の倉見才戸遺跡(第1図⑤)で3軒の大型住居を含む環濠集落、岡田西河内遺跡(第1図⑥)で集落、砂丘上の居村A遺跡で環濠が確認されている。西方遺跡でも発見された板状鉄斧が倉見才戸遺跡からも出土しており、金属器の使用開始時期を示す資料として貴重である。

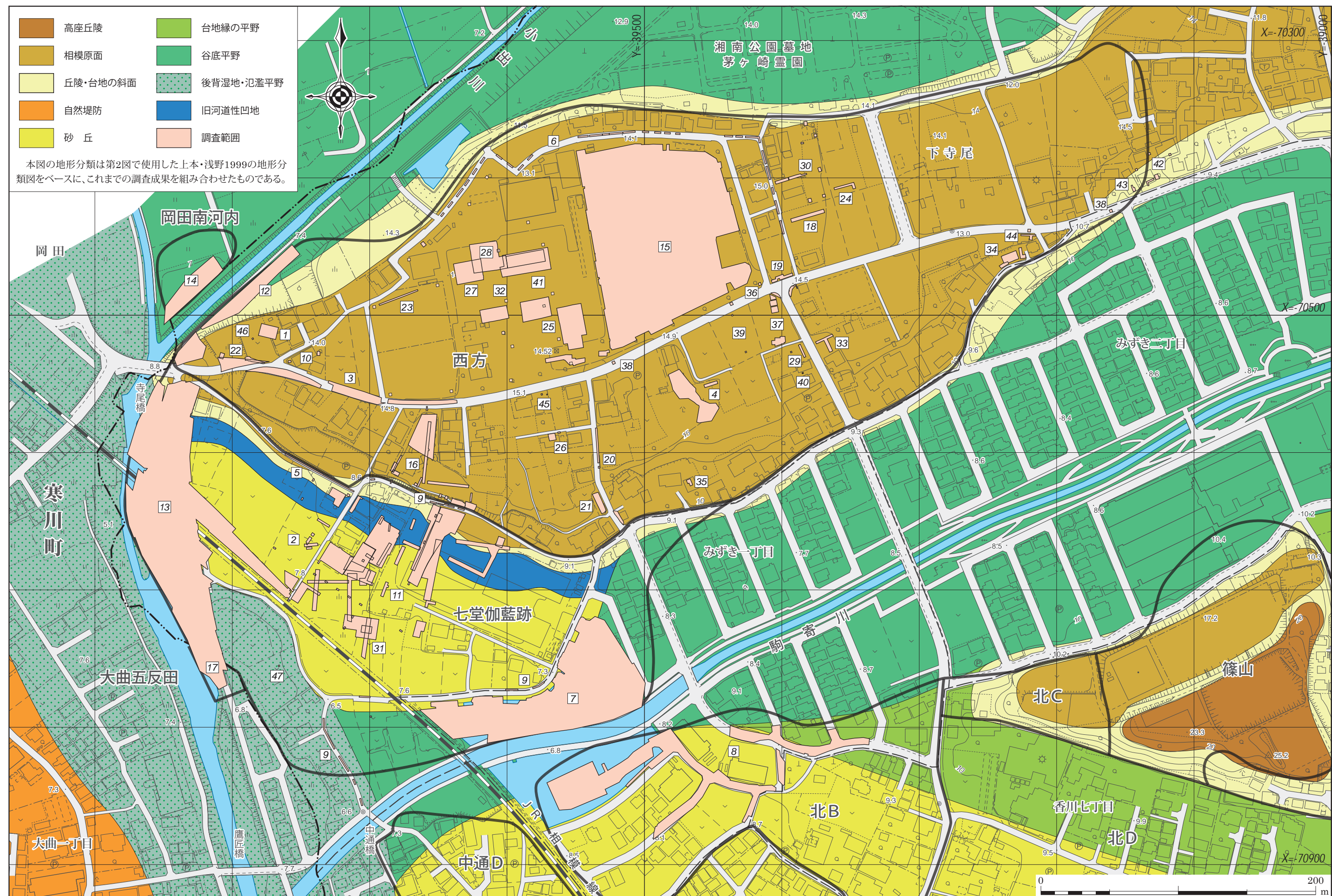
後期でも台地・丘陵縁辺部で環濠集落が造られ、臼久保A遺跡、倉見才戸遺跡、大蔵東原遺跡、高田遺跡(寒川町No.50)が知られている。また、大蔵東原遺跡では方形周溝墓15～16基が確認され、居住域と墓域が重複する状況がみられる。

さらに、七堂伽藍跡西部の小出川沿い地点(第4図13)では砂丘上に数軒の竪穴住居が確認され、東海系の土器をとまうことが報告されている(阿部ほか2010)。同様に篠山遺跡(No.50)でも在地系土器に混じり、東海系の高坏が発見されている。

3-4. 古墳時代

弥生時代末～古墳時代前期には七堂伽藍跡の砂丘上をはじめ、自然堤防地帯の各所でも集落の展開が確認され、低地への進出が顕著となる。中期は遺跡数が減少し、市内でも確認された遺構は浜之郷西ノ谷上遺跡(第1図⑦)の竪穴住居1軒のみである。

後期には自然堤防地帯、砂丘地帯とも多くの地点で集落が確認されるとともに台地・丘陵の縁辺部にも多くの遺跡が分布している。七堂伽藍跡、西方遺跡の集落は後に続く高座郡家・下寺尾寺院を造営した勢力と結びつけて語られることもある。



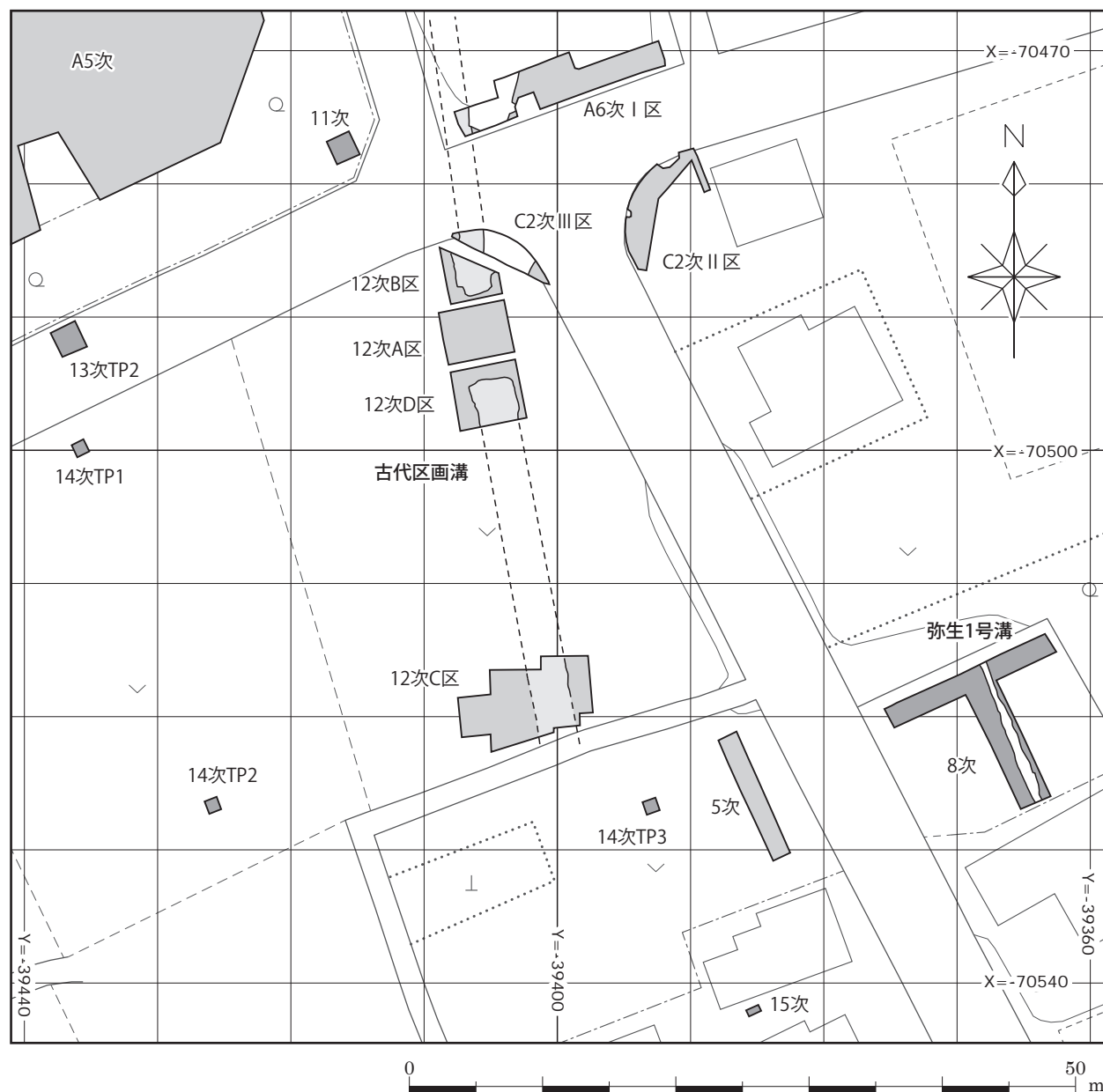
第4図 下寺尾遺跡群調査地点位置図 (1/2,500)

表2 下寺尾遺跡群調査一覧表

No.	調査年	調査名	主な遺構と遺物
1	1964	西方貝塚	縄文前期：住居内貝塚 弥生中期：環濠1条
2	1978	七堂伽藍跡第1次	古代：瓦集中部・土器集中部・区画溝
3	1986	西方A遺跡第1次	弥生中期：住居址4軒、環濠2条 古墳後期：住居址7軒
4	1986	西方C遺跡第1次調査	弥生中期：住居址1軒
5	1987	下水道敷設関連七堂伽藍跡の調査1	古代：柱穴
6	1991	西方A遺跡第2次	弥生中期：住居址2軒、環濠1条 古代：住居址4軒
7	1995～2000	香川・下寺尾遺跡群（七堂伽藍跡）調査	古代：掘立柱建物址2棟
8	1996～2002	香川・下寺尾遺跡群（北B遺跡）調査	古代：祭祀遺構、漆紙文書、人面墨書土器、皇朝銭
9	1997・1998	下水道敷設関連七堂伽藍跡の調査2～4	古代：礎石
10	1999	西方A遺跡第3次	縄文前期：住居址1軒 弥生中期：住居址1軒
11	2000～2010	七堂伽藍跡確認調査（第2～16次）	古代：寺院跡、軒丸瓦、鬼瓦、二彩陶器、銅匙、陶製相輪
12	2001～2002	小出川改修事業関連西方A遺跡	縄文：土器集中、集石 古代：溝状遺構
13	2001～2009	小出川改修事業関連七堂伽藍跡	弥生後期：住居址6軒、方形周溝墓1基 古代：川津、祭祀遺構
14	2002	小出川改修事業関連岡田南河内遺跡	縄文～弥生：旧河道
15	2002	北陵高校改築関連西方A遺跡第5次	縄文前期：住居址 弥生中期：環濠集落 古代：高座郡家跡
16	2003	西方B遺跡第1次調査	弥生中期：土器集中、環濠2条 古代：段切状遺構、瓦集中
17	2003～2005	小出川改修事業関連大曲五反田遺跡	古代～中世：旧河道、緑釉陶器、灰釉陶器
18	2005	西方A遺跡詳細確認調査	弥生中期：環濠1条 古代：版築遺構
19	2006	西方A遺跡第6次・西方C遺跡第2次	古代：住居址2軒、区画溝
20	2006	市道拡幅工事関連西方C遺跡確認調査	弥生中期：住居址2軒、環濠2条 古代：住居址1軒
21	2008	西方B遺跡第2次	古代：住居址1軒
22	2008	西方A遺跡第7次	縄文：土坑、ピット
23	2010	西方A遺跡（北陵テニスコート）確認調査	弥生：竪穴址1基 古代：竪穴址1基、溝状遺構
24	2012	西方A遺跡（ヤマト運輸駐車場）確認調査	古代：竪穴建物1軒 中近世：溝状遺構
25	2015	西方遺跡第1次確認調査	弥生中期：住居址4軒 古代：掘立柱建物、溝状遺構、柵列
26	2015	西方遺跡第2次確認調査	古代：掘立柱建物
27	2016	西方遺跡第3次確認調査	弥生中期：住居址3軒 古代：掘立柱建物2棟
28	2017	西方遺跡第4次確認調査	古代：掘立柱建物2棟、溝状遺構
29	2017	西方遺跡第5次確認調査	弥生：土器
30	2018	西方遺跡第6次確認調査	弥生中期：環濠1条 古代：版築遺構
31	2018	七堂伽藍跡第17次確認調査	古墳前期：住居址 古代：区画溝、瓦組遺構、竪穴建物
32	2019	西方遺跡第7次確認調査	古代：溝状遺構、整地遺構
33	2019	西方遺跡第8次確認調査	【本書】弥生中期：環濠1条
34	2020	西方遺跡第9次確認調査	【本書】古代：溝状遺構
35	2020	西方遺跡第10次確認調査	【本書】古代：段切状遺構
36	2020	西方遺跡第11次確認調査	【本書】－
37	2021	西方遺跡第12次確認調査	古代：溝状遺構
38	2021	西方遺跡第13次確認調査	【本書】－
39	2021	西方遺跡第14次確認調査	【本書】－
40	2023	西方遺跡第15次確認調査	【本書】－
41	2023	西方遺跡第16次確認調査	古代：掘立柱建物、溝状遺構
42	2023	西方遺跡第17次確認調査	古墳後期：竪穴建物1軒
43	2023	西方遺跡第18次確認調査	縄文前期：住居址1軒
44	2024	西方遺跡第19次確認調査	－
45	2024	西方遺跡第20次確認調査	－
46	2024	西方遺跡第21次確認調査	－
47	2024	七堂伽藍跡第18次確認調査	－

1990年代まで、相模川下流東岸にあたる寒川町・茅ヶ崎市の古墳は寒川町大(応)神塚(前方後円墳：4世紀後半：第1図⑧)と周辺に5基の後期円墳、茅ヶ崎市堤十二天(1号墳—前方後方墳・2号墳—円墳：後期：第1図⑨)、石神(前方後円墳？：後期：第1図⑩)以外には臼久保A遺跡で3基の円墳周溝、浜之郷宮ノ腰遺跡(第1図⑪)で円墳周溝1基が確認されるだけであった。平成13(2001)年以降、相模川に臨む寒川町西部の自然堤防上で調査が行われ、宮山中里・倉見川登・倉見川端(第1図⑫)の3遺跡合計で2基の前方後円墳、44基の円墳からなる後期古墳群が確認された(小林ほか2016)。

一方、6世紀後半からは段丘崖に横穴墓が造られはじめ、8世紀代まで続いたと考えられている。下寺尾地区周辺では横穴墓群の規模も小さめだが、6か所が知られている。越の山横穴墓群(寒川町 No.42：9基)、法連寺坂横穴墓群(寒川町 No.65)、広町A横穴群(No.43：5基)、広町B横穴群(No.44)のほか、篠山横穴群(No.41)と篠谷横穴群は比高約15mの丘陵斜面に構築され、それぞれ30基、18基で規模も



第5図 調査区設定図1(第8・11・13-2・14・15次調査：1/500)

やや大きい。副葬品としての須恵器、金属製品、玉類等が出土しているが、昭和40年代の開発で大部分が失われている。

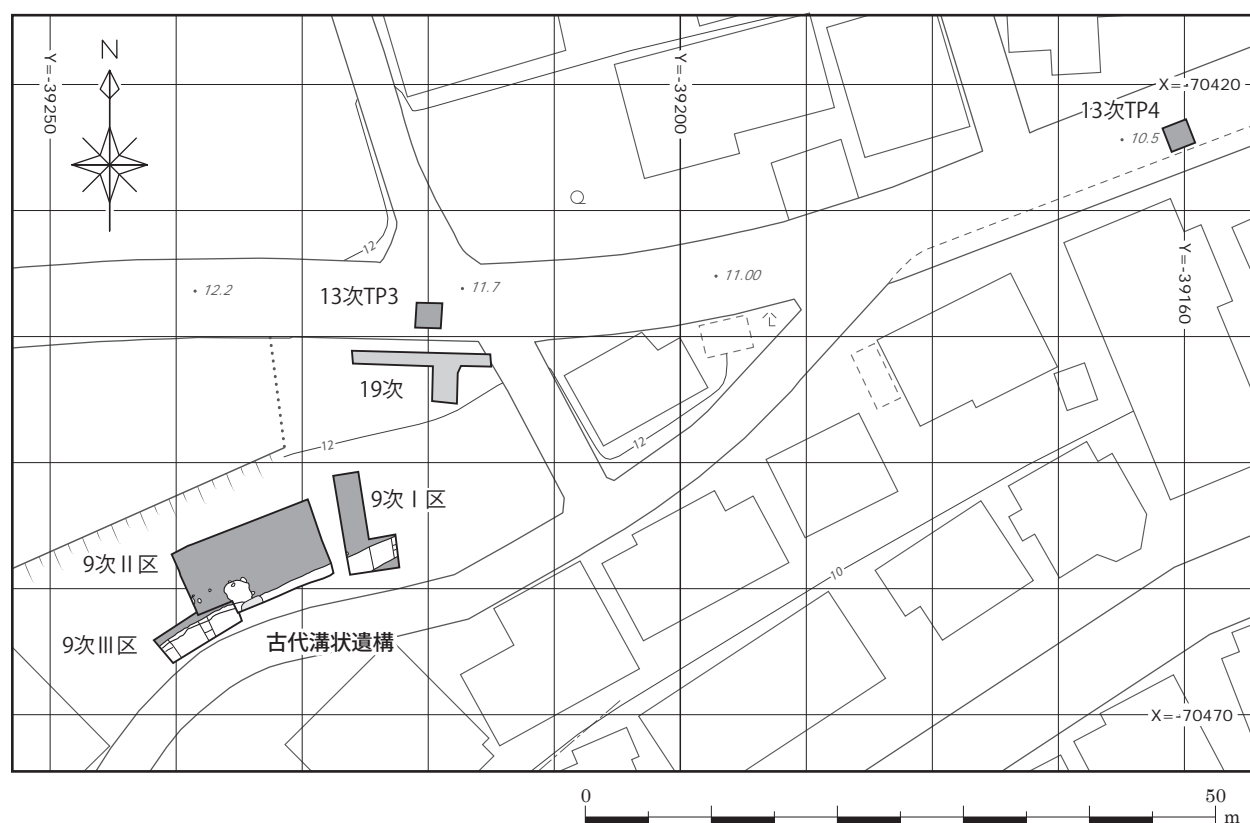
3-5. 古代

高座郡家や下寺尾廃寺を中心とした下寺尾官衙遺跡群については、1990年代後半以降の調査で詳細が明らかになり、国史跡指定に向けて作成された「下寺尾官衙遺跡群の調査」(大村ほか2013)で様々な検討を行い、成果がまとめられている。よって、詳細は「下寺尾官衙遺跡群の調査」を参照していただき、ここでは下寺尾遺跡群と周辺の公的遺跡との位置関係をみておきたい。

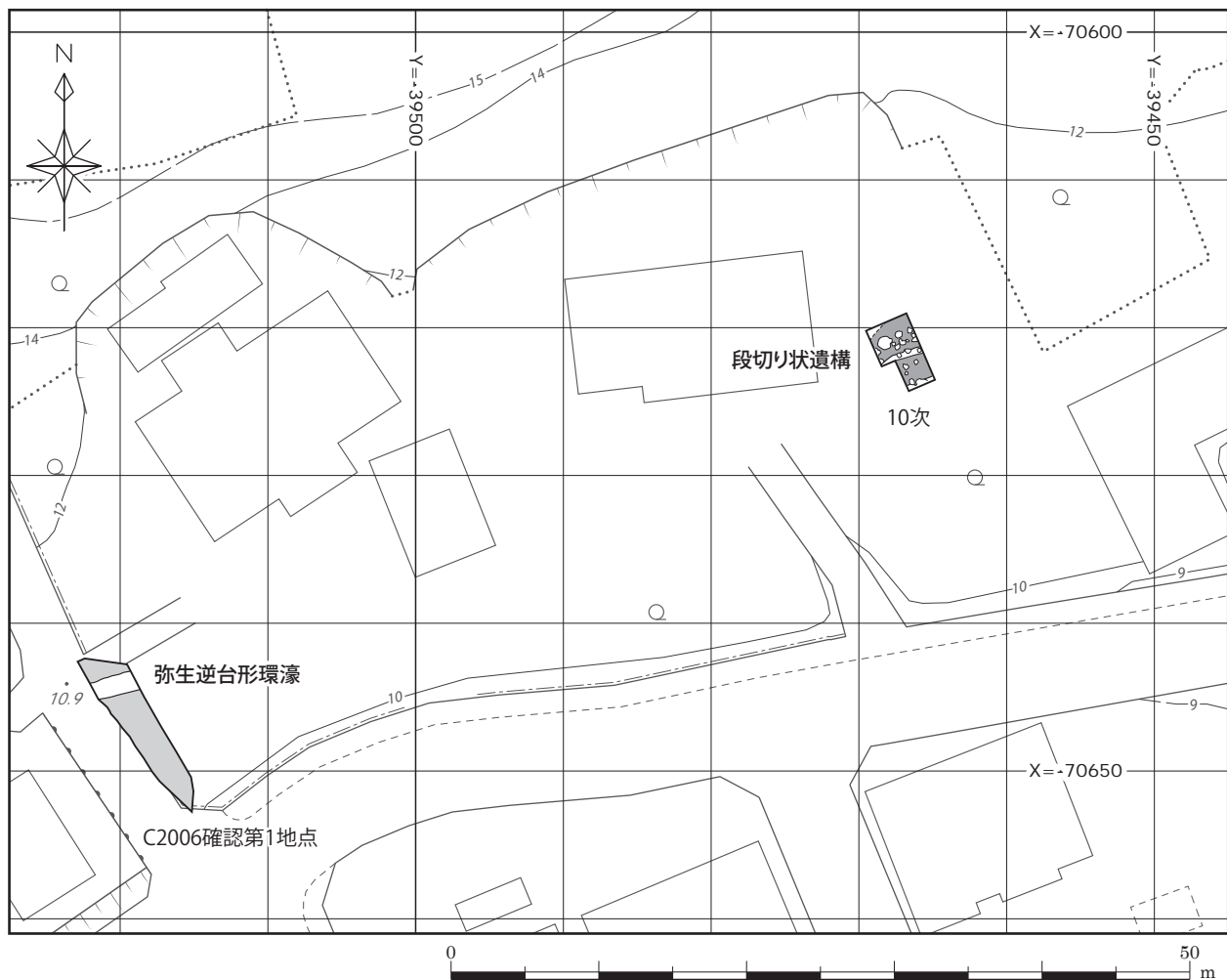
まず、高座郡家から大住国府は西南西へ約3.5km。国府域には古代東海道と推測される道状遺構も確認されている。茅ヶ崎市域では近世大山街道が古代東海道と一致する説も提示されるが、相模川をどこで渡り、寒川町南部の低地をどう結んだかは困難な問題として残されている。

次に、南南東へ3.2kmで居村遺跡にいたる。ここでは隣接する居村A・居村B・前ノ田・南谷原の4遺跡を総称して居村遺跡と記す。これまで6点の木簡をはじめ、緑釉陶器や墨書土器などが発見され、公的施設の存在が想定されている。特に、「貞観」の紀年銘のある木簡や共伴土器から9世紀後半の年代が示され、下寺尾官衙遺跡群の機能が失われる時期に対応することから注目されている。

また、七堂伽藍跡西端の「川津」から相模川河口までは南南西へ5.5km。途中小出川東岸の弥生段丘には、西久保・浜之郷地区の古代集落が連なる。さらに、下寺尾廃寺から相模国分寺はほぼ真北へ10.25kmで、相模川本流あるいは寒川神社付近から支流の目久尻川を使った舟での往来も推測される。



第6図 調査区設定図2(第9・13-3・13-4次調査：1/600)



第7図 調査区設定図3(第10次調査：1/500)

3-6. 中近世

西方遺跡での確認例は少なく、平成24(2012)年の確認調査(第4図24)で該期の溝状遺構が確認されたほかは、台地先端部の小出川旧河道(第4図12)で道状遺構・溝状遺構が、西方B遺跡第1次調査の試掘で宝永テフラを集めて埋めた土坑がある。台地下の七堂伽藍跡では段丘崖を直線的に整えた造成痕と溝状遺構、井戸などが確認され、屋敷地としての利用も想定されている。

また、鎌倉との結びつきで市内円蔵地区には懷島景義(第1図⑬)、寒川町一之宮には梶原景時(第1図⑭)の館が構えられたと伝えられる。どちらも直接結びつけられる遺構・遺物は確認されていないが、15～16世紀代には堀と呼べるほどの規模を持つ溝状遺構が周辺各所で発見されている。

第4節 本書で扱った調査地点(第4～8図、表2、図版1・2)

平成24(2012)年の西方遺跡への統合、平成27(2015)年の下寺尾官衙遺跡群の史跡指定以後、茅ヶ崎市教育委員会では史跡整備を念頭に確認調査を実施してきた。また、個人住宅建設や開発事業に対しても可能な限り現状保存できる方策を探りながら対応した。

その成果は「下寺尾官衙遺跡群」Ⅰ～Ⅲおよび「茅ヶ崎市埋蔵文化財集報」Ⅶでまとめられ、史跡範囲の追加指定、公有地化として遺跡の保存に寄与している。具体的には、「下寺尾官衙遺跡群」Ⅰで西方遺跡第1次確認調査、「下寺尾官衙遺跡群」Ⅱで西方遺跡第3・4次確認調査、「下寺尾官衙遺跡群」Ⅲで七堂伽藍跡第17次確認調査、「茅ヶ崎市埋蔵文化財集報」Ⅶで西方遺跡第2・5・6次確認調査を報告している。

令和6(2024)年3月時点で、西方遺跡の確認調査は21次、七堂伽藍跡は18次まで実施されているが、本書では未報告のもので令和4年度までに実施された小規模調査につい

てまとめた。対象としたのは西方遺跡第8・9・10・11・13・14・15次確認調査であり、未報告となる第7(16)・12次調査については今後刊行予定である。

各調査地点の位置は第4図に示したが、第5～8図で主要遺構を含めた詳細図を示した。



第8図 調査区設定図4(第13-1次調査：1/500)

第5節 西方遺跡における基本土層 (第9図)

西方遺跡における土層については、後世の削平や盛土など地点によって個別の層相が異なる場合もあるが、基本的に相模原台地に位置していることから概ね同様な堆積状況を示している。

相模川両岸に発達する河岸段丘には関東ローム層の上に完新世の火山活動による黒ボク土が堆積し、標準的な分類が把握されている。ここでは、遺跡南西部分にあたる西方B遺跡第1次調査地点において観察された土層を基準に、周辺調査地点で把握された土層の特徴を加味し、基本土層を捉えておく。

第Ⅰ層：暗褐色土 表土。層厚 20cm。標準的には宝永噴火以降現在までの堆積として捉えられる。土粒はやや細かく宝永テフラを巻き込んでいる。しまりやや不良、粘性弱い。耕作などの影響でより細分することができる。また、宅地造成等による削平が行われた後に下部層が表土化した地点では、第Ⅰ層とは明示せず、「表土」あるいは「攪拌土」と表示した。

第Ⅱ層：宝永火山灰層 層厚 7cm。一次堆積層として認められる場合に区分するが、動いている可能性が強くても宝永の純層が認識される場合は第Ⅱ層としている。本地区では、下部に径 7mm 前後の灰白色軽石層(層厚 3～5cm)、上部にスコリア質黒色火山灰層(粒径 1mm、層厚 2～4cm)に分けられる。

第Ⅲ層：暗褐色土 層厚 10cm。径 5mm ほどの黒色スコリア少量、細かい赤色スコリア中量含み、しまりやや良好。粘性やや強い。宝永テフラを含まないことから堆積年代は 1707 年以前と捉えられ、明確ではないが古代末から近世前期と考えられる。

第Ⅳ層：黒色土 層厚 10 ～ 15cm。径 5 ～ 10mm の未風化スコリアを中量含み、黒味が強い。しまり良好。粘性強い。地点により腐植の量が異なるためか色調は黒褐色から暗褐色とされている。粒径の大きい黒色スコリアは平安時代初期の延暦・貞観噴火に伴うテフラと考えられる。

第Ⅴ層：スコリア質黒褐色土 層厚 20cm。径 2 ～ 5mm の赤色スコリアを主体とするザラザラ感の強い土で、しまり良好。黒味強い。弥生時代の遺構も本層中から掘り込まれるが、古代の遺構確認面と捉えられる。他地点での色調は暗褐色とされることが多い。残存状況の良い地点では含有するスコリアの量と色調で 2 層に分けられる。

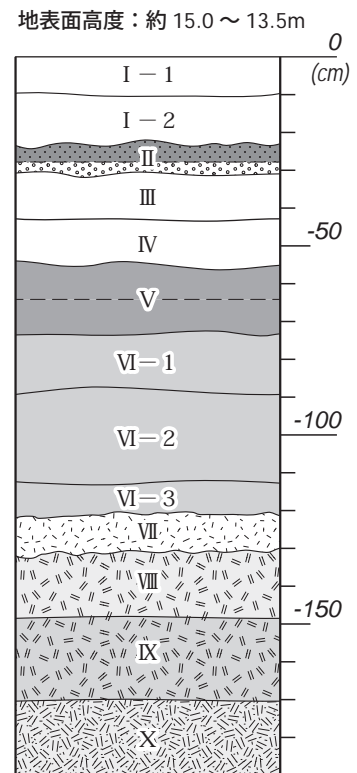
第Ⅵ層：暗褐色土 FB(富士黒色土)と総称される土層で、全体の層厚は 70 ～ 80cm を測る。上部から下に向かって漸移的に変化し、明るさ・スコリアの量で 3 層に細分され、第Ⅵ-1 層、第Ⅵ-2 層、第Ⅵ-3 層と表示している。土粒は細かくペタペタ感が強い。しまり良好。粘性強い。径 2mm 前後の赤色スコリアを上部では中量、中央部では少量含み、下部ではやや径が大きく、色調もやや明るい。

第Ⅶ層：褐色土 層厚 10 ～ 20cm。いわゆるローム漸移層である。色調は明るく、径 3mm ほどの風化した赤色スコリア中量含み、しまり良好。粘性強い。

第Ⅷ層：明褐色土 層厚 25cm。関東ローム層の最上部の L1S 層にあたる。色調は黄色味が強い部分と赤味が強い部分がある。径 3mm ほどの風化赤色スコリアを中量含み、やや硬くしまっている。粘性非常に強い。

第Ⅸ層：黄褐色土 層厚 20cm。細かい風化赤色スコリアを少量含む。B0 層にあたる。西方遺跡第 1 次確認調査では、北陵高校旧校舎基礎工事で深く掘り下げられた攪乱の壁面で観察された。上下層に比べ暗く、やや軟質である。

第Ⅹ層：明黄褐色土 径 3mm 前後の赤色スコリア少量、径 5mm 程度の黒色スコリア少量含む。しまり強く、堆積も密で L1H 層に相当する。北陵高校グラウンドで実施された西方 A 遺跡第 5 次調査では、調査区北西部の土層観察で約 40cm の層厚が認められた。



第 9 図 標準土層柱状図 (1/40)